「父親の椅子」

つぼいしさくらこ　（20 代）

私が小学生の時、親が離婚し、私は大好きだった父と離れることになりました。父に会いたい気持ちを支えてくれたのは、1 本の番組録画でした。父の仕事が軌道に乗っていた頃に出演した建築の番組です。何度も、何度も、母に隠れて見ていました。

高校生のとき、父が突然病気で亡くなりました。段々と悲しさが追いついて来ても、父の死を受け入れられないまま、悲しさに蓋をして過ごしました。父の声や姿が寂しさを連れてくるので、録画を見るのはやめてしまいました。

数年後、母が再婚しました。新しい父はとても素敵な人でしたが、私の中で【父親】というポジションになかなか入れられませんでした。私にとって、【父親】という椅子は一脚だけで、そこにはずっと、元の父が座っているからです。新しい父を【父親】として認めることは、元の父親をなかったことにするような、そんな感覚でした。

新しい父親との暮らしが始まり、父と 2 人でテレビを見ていた時のことです。突然「録画しようとしたら、随分古い番組がひとつだけ残っていたけど残しておく？」と言われました。言葉を詰まらせた後、私は「なんの番組だろう？忘れてるぐらいだし消していいよ」と、そう言うしかありませんでした。もう会えない。もう動く父を見ることも、父の声を聞くことも出来ない。父の訃報をもう一度聞くような、深い悲しさがありました。

翌日、新しい父がそっと、真っ白な DVD を渡してくれました。彼は申し訳なさそうに続けます。「内容を見ずに聞いてしまった。まさかお父さんの番組だと思わなくて。お母さんが消すかもしれないから、DVD に焼いておいた。大事に持っていて。」と。彼は最初から、私の【父親】という椅子から、元の父親を下ろそうだなんて思っていなかったのです。ただ母や、私や、妹を大切に想い、家族になろうとしてくれていました。

家族になるということは、椅子取りゲームではありません。母親だって、父親だって、何人いてもいい。血が繋がってなくてもいい。一緒に笑って、一緒に泣いて、その一秒一秒が愛になる。それが家族になることだと思います。それを 2 人の父が教えてくれました。私がいつか最期を迎えるとき、家族の椅子がたくさん並んでいますように。